
冷凍蜜柑

紺辺 奈梨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

冷凍蜜柑

【Zコード】

Z9697A

【作者名】

紺辺 奈梨

【あらすじ】

退屈な日々を過ごしていた僕は、通勤途中の電車の中で読んでいた本に夢中になつて乗り過ごしてしまった。何の気はなしに降りた駅で、時間を潰すために乗つたバスの着いた先は小学4年生の時に通っていた江田分校だつた。初恋を描いてみました。

ふうっと息が洩れる。

朝六時に起きてから何回目の便意だろうか。固形状のモノはもう出尽くし、やや黄身混じった液体が唯一自律神経の意思によつてのみ放出される。スケージュールも僕自身もそんなものを望んじやしないのに。

いつの頃だらうか。小便の回数を上回りはじめたのは。

止めよう。思い出すのは。ただでさえ無駄に消費される時間がまた圧迫するだけだ。と中学生時分まで思い出し始めた記憶を振り払う。同時に、またふうと息を漏らした。

その日の主要な記事を読み終わった新聞をたたみ、ウォシュレットのスイッチを入れ水を流す。

一日の大半をモニターを見て過ごす僕にとって、インクの匂いのする新聞という存在はインターネットの迅速性、テレビのエンターテイメント性から見ると激しく劣るが、その新聞会社によって色分けされたポリシーによる情報の選択、肉付け、有用性という点において新聞というメディアは存在意義を成していた。

トイレの次は鏡の前と相場は決まっている。手を洗う所に鏡があるのだから合理的な展開だ。

鏡の向かい側に年々後退していく髪の生え際を揉む。
自分の額の広さが最近気になつてしまふ。

といふことは僕の見る対象の生え際も気になるということだ。

今日もすでに新聞の記事で三人程、偽毛をみつけた。

うちの職場の上司の愛用のカツラと思い比べながら、新聞の広告の写真にほとんど勝つことのない精巧とは言い難いカツラを被る上司の真意を計りかねる。

隠したいのか。話の種にされたいのか。単に予算がないのか。中年の独り暮らしなら金がないわけでもなかろうにと訝る。

他人のことを気遣つている暇があれば、今日、寿命の尽きる毛根の数を少なくしてくれと神様に祈つたほうがいいだろうにと。自嘲気味に髪をワックスで整えながら、苦笑いする自分が鏡に映る。

ひねくれてきたな。

年齢とともに見えてくる景色は広がるが、知らなければ傷つくこともない光景ばかりが見えてくるのを大人と称するらしい。

ワックスで整えながら、それなりにまとまり始めた髪型を見ながらも気分が良くなることは無い。これから始まるつまらない一日が憂鬱のいくつかの要素の一つではあるけれども、そんなことより、普段使わないワックスが毛先をベタベタさせていること。そんなひとから見れば些細なことが、気分を燻らせる。

いつだってそうだ。ヒトから見れば些細なことが重大な何かを決めるのを妨げたりするんだ。

あのときだつてそうだつた。

カツラの上司は、これからはズラ之富殿下とでもしておこう。僕のレポートの方が、同僚のレポートより本質を捉えていたのに、昨晩、ズラ之富の飲みを断つたのが気分に障つたらしく、ズラ之富は出来の悪い方のレポートを採用しやがつた。そこまでならいいが、取引先は案の定、それを指摘してきて、それを取り繕つための説明を今日、僕がするはめになつた。

くそつ、なんでズラ乃富の尻拭いをしなきゃいけないんだ。いい迷惑だ。感情で行動するやつを呪いながらも、いつものことだとたしなめる僕がもう一人いる。一々気にしていたら、僕は今頃脳梗塞かなんかで死んでるところだろつ。ヤツのカツラを外した死に顔を見るまでは死なないと、それだけは心に誓つているのに。

そう、他人から見れば些細なことがいつも簡単なことを難しくするんだ。

そんなことを思いながら、冷蔵庫の中から取り出したゼリー状のカロリーメイトを飲む。朝食はこれぐらいがちょうどいい。

カロリーメイトをくわえながら、山積みされたクリーニング屋のビニールに入つたYシャツを取り出し、レパートリーの少ない中からネクタイを合わせる。

同じく山積みされたまだ開けてないテパー卜の袋に入った私服は週に一、二度しかこない出番を心待ちにしていると言うよりは半ば諦めがちに僕の着替えを見ている。独り者のストレスを発散するためだけに買われた私服は、金は有効的に使えと悪態をつくかのように散らかつた部屋の隅で固まっていた

そういう「いつ」時間は淡々と過ぎてしまう。テレビが遅刻ギリギリの電車に乗るための時間が来たと告げる。

一粒目

空虚なまま年老いてはゆきたくない。何かをしなくていい。その圧迫感が僕を支配している。

わかつてはいる。けれども、踏み出せないでいる。もどかしさだけがリアルに僕を揺さぶる。けれども、答えるわけでもなくて、探すことも努力のうちなのだと気づいている。

自宅から駅まで歩く15分は、変わらない昨日と今日と明日に突きつけられたその事実を思い出すのに十分すぎる時間だった。

無意識のうちに自宅の鍵を閉め、無意識のうちに信号が青に変わった横断歩道を歩く。

終わることのないメビウスの迷路を抜けることに思考のほとんどを傾けながら。

じりりが無意味なのか。考えることか。糧を得るために仕事なんか。

大人という部類に入つてから何百回と繰り返されてきた不毛な思考。

……もひ、止めよひ。

お決まりの結論に達した頃には、お決まりの電車の乗車口で名前も仕事も知らないけどお決まりの面子と一緒に並び、電車を待つ。隣に並んでいる女の香水の匂いからして木曜日かと、日付の表示さ

れない腕時計の針を見る。なかなか癖というものは直せない。「おまえは何かに追われているように、時計ばかり見るよな」と言つた遊び友達の言葉を思い出した。

本当のところ、クロノグラフのいくつもの針が連動して一つの時間で紡ぎあげる様を見ると落ち着くし、機械式時計のずれていく危うさが気を紛らわすのによじりいいだけなのだが、説明するのが面倒くさくて、適当に相づちを打つてその場をしのいでいた。

プラットホームにアナウンスが流れ、潮風で所々鋸びた電車が時刻表どおりに駅へと入ってきた。もう既に満杯になつた車両のドアが開く。込み合つた車内は車窓を曇らせていた。見るだけでもたれそうな圧縮陳列された車内でこれから過ごす30分を考えれば、朝食を力口ワーメイトゼリーにしたことは完璧な選択だ。

押し競饅頭の原理で車内へと入る。慣れているとはいえ、決して好きにはなれない。反対側のプラットホームにあるがらがらの下り電車の車内を羨ましく思う。

下り列車を見ながら、叶うことの無いことは忘れてしまおうと自分に言い聞かせる。その前にそんなことを考えなければよかつたんだ。忘れてしまいたいという欲求は忘れてしまって限るから。本当に好きだった彼女に亭主がいることは知つていた。くちづけで共有する一酸化炭素が多めの空気は麻酔ガスみたいにいろんな難しいことを忘れさせてくれた。湿気のあるパフュームの香りは隣の部屋に眠る幼子の寝息も忘れさせてくれた。

そのあとに残る何十倍もの後悔さえなければ今も一人は一緒にいたのかもしれない。

そんなことも忘れるに限るんだ。

あのがらがらの電車が行く三つ先の駅にそのひとがこることも叶
れるに限る。

だつて、あの幼子が無邪気に笑う度に幸せみたいな塊は触れたら
何もなかつたように崩れさつていくんだ。何千年も置き去りにされ
ていた死海写本みたいに。結局、神様のラブレターは最愛の人が生
きている間には届かなかつた。

僕の気持ちももつ届けるつもりはない。

電車のドアが閉まる音がして、ゆっくりと車両同士が小突き合い
ながら進み出した。僕は暇つぶしにまだ使い込んでいない皮の匂い
のする茶色のカバーをした一年かけても読み終わらない薄っぺらい
小説を取り出す。面白い本は時間を忘れてしまうから、つまらない
本なら生活に支障が起きることは無い。物語より次の駅と時間が気
になるのだから。

だけど、世の中は計算したつもりが全然違つ方向に行ってしまった
こともある。

つまらない本が次のページをめくった瞬間、思い出したかのよう
に息を吹き返して物語が瑞々しくなつてきてしまった。

ちゃんとつまらないままいろいろと呟きながら次の展開を気にし
ている自分がいた。

今までのつまらなさがまるで伏線かのように言葉一つずつが息を
吹き返す。読み進めるうちにカツラ之富のことや仕事のことも記憶

の中から消え、夢中になつてページをめくつた。

やがて本を読み終えたとき、電車の乗客はまばらでアナウンスは次の駅が終点であることを告げていた。

どうやら、一時間くらい乗り過ごしてしまったみたいだ。本を呪いながらも、此處のところ無かつた満足感を感じていた。

だけど、今から戻つて会社まで行けばかなりの遅刻になりそうだ。

ズラ乃富が真つ赤になつて怒鳴り散らし、奴の髪の毛の生え際がずれるのを必死になつて笑いをこらえながら反省する演技をしなければいけないことを考えると余計に重たい気分になった。

じうせなら今日は仕事をあきつてしまおひ。明日まとめて怒られればいいや。怒られるつえにあいつのしつねぐいをしなければいけないことも僕の決断を後押しした。

とりあえずは終点で電車を降りて、駅前の喫茶店にでも入ひつと思い、駅の改札に向かつた。

へえ、自動改札機がないんだ、と呟く。

初めて降りる終点の駅から見える景色にビルは一つもなかった。陽の匂いとそれを浴びて光合成をする草木の香りが僕を包み、

えらいことに降りけりたな、と思わず言葉を漏らした。

駅前にはバス停が一つ、時刻表を見ると一時間に一本しかバスがないらしい。

駅前だというのに、喫茶店の一つもないようだ。サボると決めたので、しょうがなく時間が潰せる所にでも行こうとあと30分程度で来るバスを日焼けたベンチに腰掛けて待つ。

この駅はこの街の中心から離れているからね。なんでこんなところに駅を作るかねえ、とこんな時間にスース姿の男がバスを待つのがめずらしいのか、隣に腰掛けたおばあさんが親切に教えてくれた。

おばあさんは時間なんて、この街ではだいたい合っていればいいんだよと、バスが時刻表の時間になつてもこないのに少しいらだつている僕の様子に気がついて優しくつけたしてくれた。

僕は営業慣れした相づちを打つ。

でも、それは愛想笑いではないことに気づいて、僕は僕自身に少し驚いていた。

ゆとり教育とかいう名前だけの欺瞞だらけのゆとりより確かな時間がこの街に流れているな、とまだ何も知らないのに納得していた僕がいた。

単純だな。こいつ男はすぐ堕ちる。とサタンが見てたらそういうだろ？

サタンといつのは同僚のあだ名だ。

本物の悪魔なんて見たことないし、見たくもない。人間のサタンだけで十分だ。たちの悪さでは両雄引けを取らないが。

ようやくバスが着いた。乗客は今のところ、このおばあさんと僕だけのようだ。

「おはようさん」バスの運転手がおばあさんに声をかける。おばあさんは小さく手を振りながら一番前の席に座つて、運転手に世間話をはじめた。

どうやらなじみの寄らしこ。

僕はバスの乗車口の後ろの席に付いた。ちょうどにタイヤがある一段盛り上がった席だ。酔いやすいと敬遠されがちな席だが、空いているときはこの席に座るのが僕の癖だ。あまり譲らなくてすむためかいつのまにか僕の中で決まりごとなっていた。

茶色に染まつた刈り終わり次の春へと力を溜めている段々畑と、所々に所在無げに寂しく立つてあるかかしとのんびりとぼつんぼつんと建つ農家がバスの車窓を流れてゆく。車窓を開けて空気も楽し

みたいところだが、まだ春が遠い今の時分の寒さと引き換えにする勇気は僕は持ち合わせていない。延々と続く単調ながらも息吹を感じる風景を見ながら、僕はうとうと安らかな眠りに導かれた。

お客さん、終点だよと運転手が僕を揺り起こす。僕はあくび混じりにありがとうございますと瞼を擦る。運賃を支払って降りたバス停には「江田分校前」と書いてあった。時刻表を見ると、午後にならないとバスが来ないらしい。またそのままリターンして街の中心部まで乗せてつてもらおうと思い、運転手に声を掛けようとしたが、バスはディーゼルの力のこもった排気音とともにに行ってしまった。

まあ、いいや。

とりあえず、会社の同僚に仮病を使って休むために連絡を取ろうとしたが携帯は圈外になっていた。圈外だと、すぐに電池が無くなってしまうので、バスが来るまでは電源を落としておくことにした。

こんな所でどうやって一、三時間も時間を潰すんだよと呆れながら、バス停の後ろにある分校を見た。どうやら廃校のようだ。本来なら授業中のはずなのに生徒の姿が見当たらぬからだ。校庭は地域に開放されているらしく、門は開き放しだった。分校にしては大きいグラウンドの向こうに見える一階建てのこじんまりとした木造校舎は愛嬌のある懐かしい佇まいをしていた。僕はその校舎に導かれるように、分校の門をくぐった。グラウンドの端には遊具が置いてあり、運びや ブランコや 鉄棒や 吊り輪やジャングルジムが緩い風に揺られながら、キーキーと錆付いた音を奏でていた。

僕はその中のブランコに腰掛けて校舎の向こうに見える山々と時折、とおり過ぎる小鳥たちのさえずりを何も考えずぽつりと眺めた。

「かず君ーまた授業サボって何してるのー」と突然後ろから呼び掛けられ、びくっとして振り返ると小学校三四年生ぐらいの女の子が立っていた。なんでこの子は僕の名前なんて知ってるだろ? という思いは、あどけない笑顔でほっぺを膨らまして怒るしぐさにあの山の向こうへ運ばれてしまっていた。

瑞々しい綺麗な髪の毛を一つにゴムで結んでいる奥一重の大きな目の勝ち気な女の子の名札には「四年川上ゆうか」と書いてあった。

この学年の子が分かる字だけ漢字にしてある名札は同時にこの分校がクラスが無いくらいの規模だということを教えてくれた。

さつきまで人の気配さえなかつたのに、校舎からは授業をするはつきりとした女の先生の声と音読する生徒たちの声が聞こえてきた。

全く状況が飲み込めずぽかんとしていた僕は彼女に引っ張られるがままに木造一階建ての校舎に導かれた。

ちょっと、ちょっと部外者が入つたらまずいでしょと僕は女の子に言つたが、

「また、かず君のホラがはじまつた」と女の子はまるで相手にしてくれず、「もうマジメに聞いてよ」と呆れながら僕の手を引っ張り続ける。

イヤに力が強い女の子だ。と思つていたら、いつのまにか僕の目線と女の子の目線の高さが一緒であることに気が付いた。

校舎の板張りの廊下を歩くと木が鳴く音がする。懐かしい音だ。

「遊具にはばいきんがいっぱいついてるんだから」と僕はせかされるがまま、納得がいかないままに洗い場でネットに包まれた石鹼を泡立て手を洗いながら、何気なく洗い場の鏡を見ると、そこには男の子が、嫌々ながら手を洗つている姿が映つた。鏡越しの男の子の名札は反対になつて読みづらいが、「四年いなばかずのり」と書いてあつた。

思わず目を疑つた。それは僕の名前だったからだ。

もう。そして、鏡に映る少年はまぎれもなく小学校四年生の僕自身だった。

といふことは……頭がフリーズしている。

この「川上ゆうか」という女の子は四年の頃一番仲良かった「ゆうちやん」なんだらうか。すぐに「そんなわけない」と理性が反応して余計に混乱する。

頭の整理ができずに、鏡の前の少年もぽかんと泡のついた手のまま立ひぬけていた。

「 もへ、手あらごぐりご自分でしてよ。かず君」と女の子は、僕の手の石鹼を水で洗い落してくれた。

やういえば、ゆうちやんが世話を焼くのが好きだつたつけ。押しかけ女房とからかわれたりしたな。次から次へと思い出が溢れてきた。

紛れもなく僕は何で知らないけど10歳の頃の世界にいる。そして此処が、親の転勤で四年生の頃、転校してきた「江田分校」だつたんだ。

「 今日ぐらこしつかりしてよ。かず君とは今日でお別れなんだから」と少しいじけたような声で僕に言へ。

僕は「うめん、ゆうちやん」とまづが悪そつて返した。

「まひ、もひ、おかお先生に怒られるよ」とゆづりやんがせきたてる。

僕は洗い終わった手をハンカチが無いことに気付いてズボンで拭こうとした。もひ、いつも忘れるんだからとゆづりやんは僕にハンカチを貸してくれた。ありがとうとハンカチで手を拭いて返そうとしようと思つたが、

「かず君！」と、おかお先生が教室の引き戸を開けて顔を出して怒っていたので慌てて、そのハンカチをズボンのポケットにしまって、教室へと入つて自分の席に着いた。

なんで席なんて覚えてるんだろうと思つていると、「ゆづかってなんでそんなにかずに世話焼くんだよう」とからかっている同級生にゆづりやんは消しゴムを投げて、あっかんべえとしてみせる。教室のみんなはまたそれをからかう。

「はーい！授業中ですよー！」と、おかお先生が黒板を叩いて、みんなの背筋がぴしつとなる。僕も姿勢を正しながら、怒り始める手がつけられなかつたと、おかお先生のことを思い出してくくりと笑つてしまつた。先生はそれを聞き漏らさず、「かず君ーー次の段落を首読して」と置み掛けた。「はいっ」と飛び上がりつて起立し、僕は机の上に置いてあつた教科書の「だいぞうじさんと雁」を音読した。

どうやら、ゆづりやんがいつそりページを開いていてくれたみたいだ。段落を読み終えると、「かず君、もしかして音読の練習した？」と先生が聞いてきたので、僕は「してないです」と正直に答えた。おかお先生は首をかしげながら、「おかしいわねえ。いつも漢字でつづまづくのにね。今日は良く出来てるわ」と褒めてくれた。「当たり前だよ。大の大人が漢字読めなくてつまづいてたら田も当たらない」と思いながら、おかお先生は怖いけど、何か頑張ると必

ずみつけて、人よりどんなに下手でも褒めてくれる先生だったということを思い出した。大学で赤点をよこしやがった教授と偉い違いだ。先生と名がつく者、全てが偉くは無いんだといつごろから知つてたつけなどと他愛もないことを考えていると授業の終わるベルが鳴つた。

六粒目

「ひやら次は給食の時間だ。

「はい！班」とに席を並べて……』と、おかお先生が教室の中を響き渡る声を出した。

四年生、12人が4人ごとに班になつて机を向き合わせた。僕の斜め前に座るゆうちゃんとは斜向かいになるところだ。

僕の向かいがめぐちゃん。こいつもゆうちゃんに負けず劣らず勝気な子。一つ班を挟んで、廊下側の班に座るお山の大将のテルもケンカではかなり手こずっていたな。

そして、僕の隣りに座るのがトシ。親はこいつくんの大地主らしくて、その親の遺伝子を受け継いで学校内でも評判の秀才だ。だけど、そんなところを微塵も感じさせないトシは僕にとって非常に頼りになる存在だった。

宿題するのに何度もお世話になつたことか。感謝感謝。

廊下側から順番に書くといつなる。

ゆき かおり
テル ツヨシ

あい まき
ジユン ヒロ

ゆうか めぐみ

10年以上経つてゐるのに、よく憶えてるもんだなと自分で感心してしまひ。

机にナプキンを広げて、箸を行儀良く並べていると、割ぽう着を着た給食当番のテル、シヨシ、ゆき、かおりがカレーの匂いを引き連れて、給食を運んできた。今日の献立はカレーとゴハンとひじきの煮物と冷凍蜜柑と書いてあつたな。

ひじきと人數分しかない冷凍蜜柑は別としておかわりの争奪戦になりそうだ。現にもうすでにテルのよそつたカレーが少ないと優良肥満児のジョンが文句を言つてゐるし。テルは「そんなことねーよ。」と否定しているけれど、ちゃっかりテルの器にはカレーが山盛りになつっていた。

子供つてわかりやすいと思いながら、僕も今は小学四年生だといふことを思い出した。

実は僕の頭の中もようやく落ち着いてきて、元の自分に戻るにはどうすればいいかとあれこれ考えていたけど、こんな時間も悪くないなど目の前にある給食を見てぐーぐー言つてゐるお腹をさすつた。隣りのトシも引き算解いているときはあんなに冷静なのに、「いただきます」と早く言いたいのか、カレーを今にもヨダレが垂れんばかりに食い入るように見て貧乏搖すつしていた。

頃合いを見計らつたように先生が曰直のまきひやんヒロニ「では、いときましょ」 と声を掛ける。

「はーい。いただきます」とおしゃれなヒロの爛漫な声に「いただきます!!」とクラス全員の声が後に続く。やっぱり大将のテルの声が一番力強い。

僕もお腹が減っていたので給食にかぶりついた。カレーがちょっと甘かったので、ひじきにすぐ手をつける。この歳になつてよつやくひじきも食べられるようになつたけれど、この頃は残さず食べなきやいけないのが苦痛だったなど、いつも居残つて食べさせられていたヒロの奴をちらりと見ると、案の定、ひじきの前で固まつていた。がんばれヒロ!!と心中でつぶやいていたらヒロの奴があいちゃんといわしょ喋っていた。

「でも、ひじきと冷凍蜜柑の交換を交渉してくるらしく。ヒロがあこげやんを押るように手を合わせ冷凍蜜柑は愛ちゃんのもとに渡つた。

交渉成立だ。

ヒロは蜜柑をまだうらめしそうに見てくる。あこつは冷凍蜜柑だけはちやんと食べてこたつた。

あこつは数少ない好物を差し出したところとは背に腹は変えられないことか。よつぱんとひじきが嫌いなんだな。

その様子をひじきをほおぱりながら見ていると誰かの視線に気付いた。おしゃれなヒロを食べている僕を珍しそうに見ていた。

どうしたん?と食べながら聞くと、

「かず君、こつから食べれるようになったん?」

「ひこ最近」といたえる。

と並んで15年後から計算して、つい最近だけ。

「えりこなあ」とゆひちゃんは自分の前にある手がつけられないでいる。そういうひじきを見ていた。そつだ、ゆひちゃんも苦手だっただけか。

「ひじき食べようか?」

「うそ。じゃあ、みかんといつかんしよう」と救われたよひちゃんのひじきをペロリと食べて見せた。

から、

「いいよ 食べてやるよ」と蜜柑の申し出を断り、ゆひちゃんのひじきを平らげた。いくら成長期とはいえ、小学四年生のお腹には過

負荷だったようで、給食を食べ終わったときには僕のお腹はいっぱいでベルトがきつくなっていた。

「失礼だなあ」と返す。

そんな会話をしていると隣りのトシと向かいのめぐちゃんまでいつも訴えるように見るもんだから、仕方なしに全部で四人分のひじきを平らげた。いくら成長期とはいえ、小学四年生のお腹には過負荷だったようで、給食を食べ終わったときには僕のお腹はいっぱい

冷凍蜜柑をもらわないでよかつたと切実に思った。

七粒目

給食が終わって昼休みの始まるチャイムが鳴ると
「かずーつ、サッカーしようぜ」と大将のテルが僕を呼ぶ。

鋼鉄の胃袋を持つこの漢にはさすがのひじきも通じなかつたらし
い。カレーの入った給食鍋が空っぽになつてゐるのがなによりの証
拠だ。

「今、行くよ」と手を振つて見せる。

この学校には昼休みに高学年はサッカーをするといつ不文律みたいなものがある。テルは5・6年生相手でも当り負けしない強さがあつた。中田英寿のドリブル。と言つたら大げさだけど。伊達に一年中、半袖短パンではないのだ。

「お待たせ」とグラウンドの隅でリフティングしているテルに声をかけると、リフティングしていたボールをツヨシに預けて、あつちいこうぜと遊具置き場を指差す。

「サッカー ゃんないの?」と訊くと、何も言わず、背中を僕に向けたまま「いいから来いよ」と手招く。僕は、なんだよつて思いながら、駆け足でテルについていく。

「座れよ」とぶつきら棒にブランコを指すから、僕は少し乱暴にブランコに腰掛けた。

しばしの沈黙を誤魔化すように一人はブランコを漕ぐ。ちょっと離れた鉄棒で一年生が逆上がりの練習している以外は遊具置き場に

せひとはこなかつた。

「おまえや、今田で！」の声が、最後だろ？」ナルが切り出す。

「ああ」と地面を少し蹴る

「戻りこむんだろ？」

「何を？」

「俺に言わせんなよ」

「黙ってくんないとわかんねーよ」

「ああ、めんどくせー」

「おまえが誘つたんじやん」肉弾戦では万に一つも勝ち田は無いけど、口げんかではちひつとやけいひじや負けない血食のある僕の言葉はきつくなつてゆく。

テルは諦めたよう」「やつかさおまえの」とおもなんだ。
『戻りこむんだろ？』僕以外に聞こえないように低く話す。

「そんなことないだろ」

「ここ一歩。やつかさおまえの」とおもなんだ

「そんなのなんでわかるんだよ」

「わかるんだよ」

「だから、なんでだよ」

「わかるつたら、わかるんだよ」

「だーかーら、なんでかつて聞いてんの」

テルはちえつと舌打ちして「俺がゆうかに告つたら。フラれたんだよ。玉砕でーす」と外人みたいなリアクションで恥ずかしさを隠すようにおどけてみせる。

「フラれたのと、俺のこと好きなのはまた別だ」

テルはみなまで言わせるなつて顔をして「なんで俺じゃダメなのかつて聞いたんだよ」

……「そしたらカズの」と好きだつてさ」

「まじ?」

「大まじ」

「命賭ける?」

「ああ、命かけるよ」

「出べそのお前のかーちゃんに誓つて?..」

「ああ、かーちゃんにだつてちかえる。出べやまよけいだ」と僕を小突く。

……一人は黙り込んだ。一人は敗北のため。一人はその事実を初めて知ったために。

聞こえるのはサッカーの掛け声とブランコの錆付いた音だけだった。

八粒目

僕は15年前の記憶を頭をフル回転して呼び起し始めた。

ゆうちゃんのこと俺はどう思っていたんだろう

確かに、

ゆうちゃんと一緒にいると楽しくて、
ゆうちゃんと一緒にいればどんな遊びでもよくて、
スマートミーのF-ZEROではいつも勝てたし、
忘れ物が多い僕に鉛筆を貸してくれたし、
夏休みの宿題も最後の日に見せてくれたし、
飼育当番も代わってくれたし、
僕の枯れかけの朝顔を救つてくれたし、

ザリガニを釣つて見せるとすごく喜んでくれたし、
間違つてお隣の窓ガラスをボールで割つたとき一緒に謝つてくれ
たし、
ウソをついた自分が悔しくて泣いてたとき傍に居て励ましてくれ
た。

だけど、だけど、

僕はゆうちゃんに何一つしてやれてないんだよ。

そう、何一つ。

なんで僕なんか好きになつたんだよ。
テルのほうがよっぽど頼りになるし、

トシのまうが頭もいいし、

ツヨシだつてジュンだつてヒロだつて僕よりいいところみんな持つ
てる。

なんでも、僕のこと好きになってくれたんだろ

僕は泣いた。

泣いたんだ。いろんな感情がじりじゃ混ぜになつて、わからなくなつて泣いた。恋とか知らない僕がいた。「僕は25だぞしつかりしろよ」と自分を諭そうとするけど、涙は止まらなかつた。

うれしいって気持ちはたしかにあつて。好きなんだとも思う。でも、どんな好きなのかもわからないし、どうすればいいかわかんないし、だいいち

今日で最後だよ……もう時間ないじゃないか!!

……。

そこには泣きべそのただのハナタレ小僧がいた。

テルは僕を見ないで泣き終わるのを待つていてくれた。「ゆうかに絶対カズには言つなつて口止めされてんだ」と僕の肩を叩いて、「あいつの言う書きかないと殺されちゃうだろ」と内緒話をするように付け足して笑つてみせた。

「いっ、僕を励ましてくれてんだな。

僕は何も言われたわけでもなかつたけど袖で鼻水を拭きながら「うん」と応えた。

泣き終わった頃には、昼休みはほとんど終わっていた。

僕の記憶が確かならば、小学四年のこの日を最後に分校の友達とは接觸していない。

そう、この日は特別な日ではなく、何も起きて

普通に学校に行き、普通に給食を食べ、普通にサッカーをし、普通にお別れ会をし、この分校と別離した。

今、テルから、こんなことを打ち明けられたことは僕の記憶に無かつた。

記憶だけではなく事実が無かつたのだ。もし忘れていたとしたら、よっぽど神経が図太い男だ。僕はさすがにそこまでは図々しくは無いと思つ。

なぜだかわからぬけれど、僕はこれから先の人生に干渉できるチャンスを与えたのかも知れない。

そんなことを神様にしてもらつような善行をした憶えは無いが。

カツラを獲ろうとする欲求を忍耐で押さえ込んでいた日々が、心当たりだと言えなくもないけど。

誰もが一度は思つこと、

もしあのとき、あれをしていたらよかつたのに。

そう、後悔は先に立たないのだ。

味気なく終わってしまったこの分校時代の人間関係を変えること

が、何かを変えようとしているのかもしれない。

どうすればいいだろ？

なぜこんな機会を僕は与えられたのだろ？

もしかしたら、ただの夢かもしれない。

起きたら、なにも変わらない日々が横たわっているのかもしれない。

そもそもテルはなぜこんなことを打ち明ける気になつたのか聞いてみたらわかるかも知れない。

あるいはわからないかも知れない。

そういえば、僕は傷つるのが怖くてヒトの気持ちを深く知りうとしなかつた。

そんないつもの僕ならテルに真実を聞くことを躊躇していただろう。

なぜ 躊躇する必要がある？

わからない。

誰かが傷つくの？

わからない。

それならやつてみればいいじゃないか？

わからない。

こつものおまえなら何も聞かずに終わつてただろ？

でも、おまえは今を生きているのか？

今、大切なるものもなく満員電車に乗る日々がおまえの望んだもの
なのか?
……。

「どうなんだ?」

「……わかったよ 聞いてみるよ。」

僕は僕に答えを出した。

とにかくやつてみようとした。

だつて、この人生がこれ以上つまらなくはならないだらうから。

神様つているのかもな。

「…………あのぞ……」

「うん?」

「聞きたいんだけじゃ」

「ああ」

「テルはどうして打ち明ける気になつたの?」「決まつてるじゃないか、おれたち友達だろ」

「さあね」と僕はおどけて見せた

「こいつ、ころすぞ」テルが僕を小突く
お互い、顔を見合させて吹き出した。

校舎から昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴り響いた。

……そう単純なことだった。

友達なんだよね。

九粒目

五時間目は理科の授業。

夜空が方角によつてどういうふうに見えるかという内容だった。
そういえばこの町の夜空よりきれいな星空を見ることはなかつた。

いつかの五月、テルとゆうかとまきと僕の四人で町外れの小川に
蛍を行つた。舞う蛍を捕まえようと虫取り網を振り回した先に
見えた星空も僕らは捕まえられるんぢやないかと思った。

スピカ、アルフェツカ、プリケルマ、アルクトゥールス。その頃
は名前も知らなかつた星たちに僕らはお互いの名前をつけた。

この間、玩具屋で買つた1万個の星が輝く家庭用プラネタリウム
もかなわない。結局は僕の部屋は四角い箱でしかないのだから。そ
れに見たことのない銀河だと思つてよく見たら、部屋の染みだつた
り、黒光りする宇宙船が横切るなんてこともある。

終了のチャイムが鳴つた。スライドショーは北天の夜空を映して
終わつた。

お別れ会？

とても楽しかつたよ。みんなの目差しは暖かくて。

中には泣いてくれた子もいた。

ありがとう。でも、僕はそんな価値のある人間じやない。

涙と一緒に僕の僅かな記憶も流してくれていこよ。

そんなこと言ひなよ。僕の心が丸見えならテルはやつひて本氣で怒るだろ。

そうだな。

そういうふうに見えるのはやめようとしたばかりじゃないか。

だから、

僕は出来るだけ笑うことにしてた。

もし、みんながこの僕を憶えていてくれるとしたら、笑顔がいいから。

そうやって僕はみんなから貰つた寄せ書きを高々と掲げた。

みんなこと、忘れないぞ。

放課後、僕が机の中の荷物を整理していると廊下の方からテルが呼ぶ声がする。

「何？」

「何？　じゃないだろ。ひとがわざわざ絶好のしきゅえーしょんを用意してやつたのに」

「シチュエーションなんて慣れない横文字使ってビーツしたん？」「つるさいな。今日じゃなかつたらぶん殴つてるぞ」いいからよく聞けよ、と耳打ちする。

テルが遊具置き場で遊ぼうとやがりやんを誘つたらしく。そこで

「一人きりになつてゆうちゃんに告白しようということだ。

「ありがとう、という気持ちでいっぱいだつたけれど僕はその時、「うん」としか言えなかつた。

僕は道具箱、絵の具セット、習字セットなどをランドセルに、ランドセルに入らないものは手提げ袋に入れた。
あまりの荷物の多さに口頭、荷物を持ち帰つていなことを悔やんだ。

遊具置き場へ歩いていくと、

「テルくんは？ なんだか引っ越しみたい」とジャングルジムの邊からゆうちゃんの笑い声がする。

「引っ越しだし。テルは先生に呼び出されてたよ」テルと打ち合わせどおりのウソをつく。

ジャングルジムの頂上を見上げる。夕日が眩しく逆光になつてゆうちゃんの表情は見えないけど、なんだか澄んだ声が寂しげに聞こえた。

「ジャングルジムに何で登つてるの？」
「わたし、学校でこの場所が一番好きなんだ」「どうして？」

「登つてくればわかるよ」

僕もてつ辺に登つてゆうちゃんの横に座つた。

「見て」ゆうちゃんが空を見上げた。

藍色に染まつた空に幾筋ものオレンジ色や赤色の雲が走つていた。
僕は思わず息を呑んだ。

「空がこんなにも近いでしょ」ゆうちゃんは誇りげに叫んでいた。

「うん」

「なんで夕方の空つてこんなに赤いのかなあ」ゆうちゃんが独り言のように呟く。

「空氣つて粒で出来てるって知ってる？」

「うん。でもそれと夕焼けが赤いのはどんな関係があるの？」

「太陽からの光のうち、青い光は強いけど、その分、空氣の粒に弾かれて僕らの所に着く頃にはバラバラになつてしまつんだ。
だけど赤い光は、青い光みたいに強くないから、空氣の粒に弾かれてもバラバラにならないで僕らの所まで届くんだよ。だから赤いんだ」

ゆうちゃんが僕をじーっと見てくる。僕は緊張してまともにゆうちゃんの顔を見れない。

「ふうん。よくわからないけどカズくんはもの知りね」

「そんなことないさ」「ねえ、

「ゆうちゃん……」

「何？」

心臓がもつと酸素を運べとせつついで、僕は大きく息を吸つた。

「テルから聞いたんだけど」

「もしかして バレちゃった?」「ゆうちゃんの顔が夕焼けみたいに赤くなる。

「そのもしかして」

「全く、テルくんにはあれだけ黙つとこいつ言つたのに気になくていいんだよ。」

「わたしが好きなだけなんだから」

「あの方」

「だーかーらー」

「ゆうちゃん、聞いて。

「こんな気持ち初めてでどんな風に言えばわからなかつたけど、今日、テルと話してわかつたんだ」

「ゆうちゃんのこと、

「好きだよ」

「一緒にいたいよ」。

そして、胸の痛みが洪水のように溢れ出した。

「なの? 今日でお別れだろ? こんなに一緒にいたいのに明日から離れ離れなんて。なんで 僕はこの気持ちにもつと卑く氣づいて、もつと早く正直になれなかつたんだろう?」

顔中、鼻水と涙だらけになつた。どんな大女優だってこんな不細工な泣きつ面はできやしない。

「わたしも一緒にいたいよ。でも離れ離れでも一緒にいることはできるよ」

「ゆうちゃんの瞳にも夕日が滲んでいた。

「どうやつて?」

「かずくんが教えてくれたじゃない。」

「太陽とわたしたちはこんなにはなれていても、空氣のつぶがじやましても夕日のこの光はバラバラにならずに届くんでしょう?」

「そうだよ」鼻をするする僕。

「かずくんとゆうかだつて出来るはずだよ。どんなに離れていても

一緒に

「そうだといいけど……」

「そんな弱氣でどうするの……同じここたつて同じ空の下じゃない」

「うん」同じ空の下、僕らは同じベクトルの光

「わかればよろしい」

「えらそつだなあ」ありがと。。

「つむせこなあ」

涙を拭つと、夕日が山々の稜線をオレンジ色に浮かび上がらせジ
ヤングルジムを暖色の光が包んでいた。

十一 粒田ヒロログ

溢れる光の中、校門の前で母親の手を振る影が見えた。本当に別れの時だ。

「手紙……書くよ」

「うん。でも、かずくんから年賀状着たことないけど大丈夫かな」悪戯に笑う。

「やな感じだなあ」ムスッとする。

「うそうそ。待ってる。わたしも書いていい?」

「うん。でも、芋の判子はかんべんね」

「ひつどーい。去年の年賀状、自信作だったのに」

僕らは一しきり笑い合つたあと、ジャングルジムから降りて母親の待つ校門まで黙つて歩いた。

いつまでも一人一緒に歩いていたかった。
もつと同じ空気を吸っていたかつた。
ずっと同じ夕日を浴びていたかつた。
ここからいなくなるなんて考えられなかつた。
でも、時はそう思えば思う程、早く過ぎて
気がつくと、母親の待つ車の前まで来ていた。
「さよなら。じゃないよね?」

「さよなら。じゃないよ」ゆうちゃんは微笑む。

「絶対、手紙書くし、電話もするし、ゆうちゃんのこと思つてる」

「うん。わたしも

動き出さうとする車の窓を開け、僕らは指切り約束した。

「またね!!」

「またね!!」

やがて車は徐々に進みだし、ゆうちゃんはどんどん小さくなつて

いく。

遠くなればなるほど僕は手を大きく振った。やうやく見つめられるよ」と、

ジャングルジムと同じ今日が僕らを見ていた。

終わり。

Hペローラー

「お客さん、お客さん」

僕はその声に振り起された。ぼやける目を擦り、見上げると朝乗ったバスの運転手だった

「ここは？」

「随分、気持ち良さそうに寝ていたから、終点までいって戻つてきちゃったよ」

「どのくらい寝てました？」

「そうだなあ。片道一時間だから、四時間かな。お客さん、相当疲れてるんだねえ」

僕は欠伸を噛み殺して、「お蔭様でかなりすつきりしました

「僕、昔終点の江田分校に通つてたんですよ」

「Hデン？なんだそりや、聞いたことないぞ。なんかいい夢でも見たんかい」バスの運転手は首を傾げる。

「どうやらそうみたいですね」

「ああ、やっぱり夢だつたのか。

僕は寝すぎて節々の痛む体を起こして、運賃を払いバスを降りた。

やつぱしな。そんなに上手くいくわけないか。

僕は会社に休むのを連絡してなかつたことを思い出し、電話しよ

うとポケットの携帯電話を探した。

ポケットを探ると布切れみたいなものが指に引っ掛けた。

取り出してみると、自分の物ではないけどどこか見覚えのあるハンカチだった。

……あつ。

僕は思い出した。

それはゆうちゃんから借りて、返しそびれたハンカチに似ていた。
僕は呆然としていると、ポケットの携帯電話が鳴る。慌てて携帯電話を取る。

メールが一件着ていた。

送り主は川上優香だった。

+ 一粒皿ヒューローク（後書き）

拙い文章ですが読んでください。どうもありがとうございました。

出来れば感想などくださいると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9697a/>

冷凍蜜柑

2010年10月10日02時16分発行